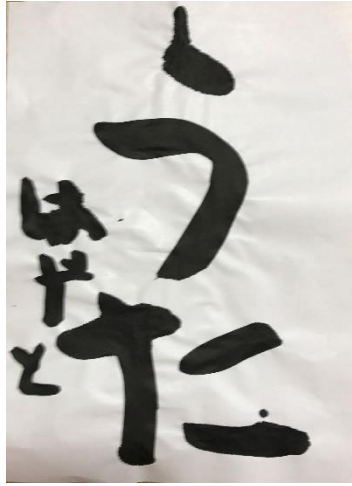


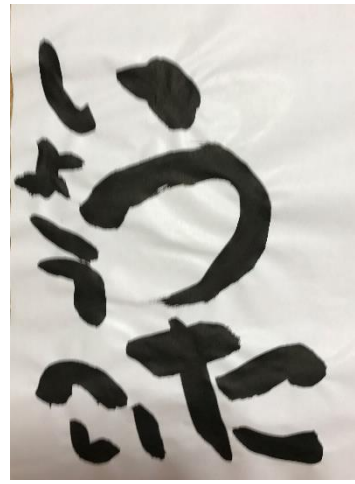
書評 藤波礼子



2年 H・A

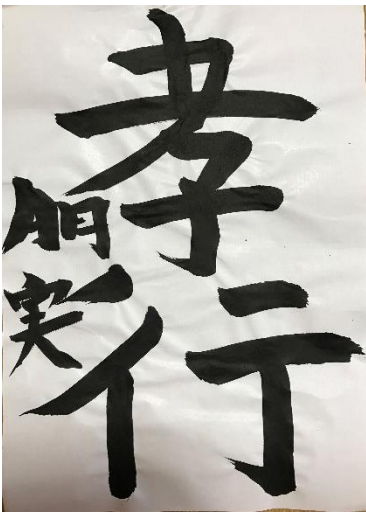


年中 H・H

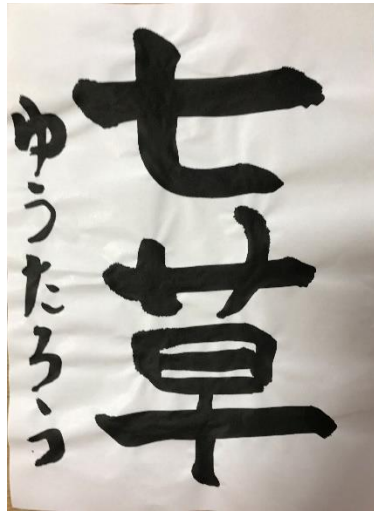


年中 K・S

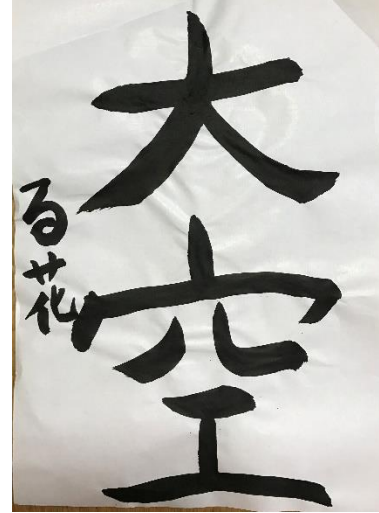
K・Sくん 墨をたっぷりつけて、堂々と書けました。「う」は勢いがあり、はらいがきれいです。
 H・Hくん 紙いっぱいのにびのびと書けましたね。中心が通っていて落ち着きのある作品です。
 H・Aくん 「大」の一画目、二画目が力強い。「空」は、空間を意識して書けました。



6年 T・T



3年 Y・Y



2年 J・R

J・Rさん 「空」の字は、悠々とおおらかな気持ちで書け、素晴らしいです。中心も通っています。
 Y・Yくん 墨をたっぷりつけて、力強く書けました。草の縦線をどっしりと書くと全体がしまります。
 T・Tさん 一筆一筆、集中して、心を込めて書いています。半紙から飛び出しそうな迫力のある文字です。

【作品の観方・着眼点】

作品は先ず誰が書いたかという事です。それぞれの生活、年齢によって、筋肉や精神の発達もちがっていますので、「何年生の作品であるか」次に、「どの程度の経験があるのか」ということでもちがってきます。作品の良さだけで見ますと、よほどの作家でも、子どもが無心に書いた良い作品にはかないません。問題は、子どもはその価値を知らない。専門家はその美しさを知っている、ということですから、あまり大人の作品に比べて観方を考えるのではなく、その作品に子どもらしい伸び伸びとした感じ、生き生きとした活気が感じられるか、という事です。次に、学年にしたがって、とめるところではとめているか、ハネているところはハネているか、という点をみます。級が上になるにしたがって、筆の入る方向、線の長短、半紙一枚での安定感が大切になります。高学年や中学生になると、「点はていねいに」「トメやまげはしっかり」「たてはどっしり」「左はらいは速めに」「右はらいはゆっくりひいてさいごをやや速め」「横はのびのび」といった事を基本とします。くれぐれも形にとらわれて堅く小さくならぬよう、作品は離れて見ながら互評させることです。さいごに、悪い点は指摘されてもどうしたらよいかわからないものです。良さを指摘することが要点です。(「生命の教育」誌より)